

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：32652

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770262

研究課題名(和文)東西ドイツにおける空襲記憶の形成(1945～1975年)

研究課題名(英文)Collective Memories of Bombing War in BRD and DDR (1945-1975)

研究代表者

柳原 伸洋(Yanagihara, Nobuhiro)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：00631847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツ(旧東西ドイツ)での現地調査を複数回にわたって実施した。東西ドイツの戦災トラウマと復興の変遷について公文書・新聞雑誌を用いて考察した。この成果は、口頭発表および論稿としてまとめあげて公刊した。とくにプフォルツハイム市での調査を実施し、公文書館での調査および慰霊祭の踏査について成果報告した。また日本の空襲研究・証言収集活動の最大組織のひとつである「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」では、日本の研究・活動者に対してドイツの戦後の空襲をめぐる問題の状況を伝えることができた点が最大の成果だと考えている。今後も広く一般に向けて、戦後の空襲記憶のあり方を問う予定である。

研究成果の概要(英文)：In this research, I performed a series of my surveys in Germany. I analyzed the history of cultural memories in BRD and DDR with the historical materials of german cities (official report, news papers and magazines).

I made presentations on work shops and published papers. Especially, I went to a city, Pforzheim in Baden-Wuerttemberg every year, in order to take part in the memorial events on 23rd February and to visit the city archive. Through the connection with the Japanese Association of Recording the Bombing War and War-Damage, I could spread my research results.

研究分野：ドイツ現代史

キーワード：空襲 記憶文化 市民社会 西ドイツ 東ドイツ

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦中の空襲は、戦後社会に看過できぬ影響を与えた破壊行為だったにもかかわらず、「復興」の言祝ぎの影で公的に多く語られることはなく、同時にトラウマ的記憶として忘却の対象とさえなってきた。たとえば具体的に、空襲は都市構造を変え、家族構成員の死亡などを含め共同体そのものを変質させたにもかかわらず、である。しかし、「語り」が途絶えることはなく、市レベルでは議論もなされてきた。この点の地道な掘り下げの積み重ねが新しい戦後史像を提起すると考えている。

また、戦後70年以上を経た現在、体験者減少が決定的になりつつある今日だからこそ、空襲と戦後社会の歴史的連関の考察に取り組む必要があると考え、本研究をスタートさせた。とくにドイツにおいては研究成果が多く出されつつあるなかで都市横断的・東西ドイツ横断的に復興・空襲記憶の構築について考察した研究は少なく、さらに日本との比較研究も価値あるものだと考えて研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、戦後ドイツの空襲に関する記憶形成がいかに実践されてきたのかを明らかにすることを目的とし、日本の空襲記憶の形成との相違点を考える材料として提供することを目的としていた。また、近年、ドイツにおいて成果が出されつつある戦災記憶の研究を踏まえたうえで、公文書・雑誌新聞記事を中心とした慰霊祭などの実施過程を詳細に検討することによって、国際的にも新たな知見を提示することも目的とした。これは本科研費に接続して実施される国際共同強化研究の調査へと引き継がれる。

研究費をもちいて、ドイツの都市レベルの文書館・図書館・古書店での調査を実施した。さらに、空襲犠牲者の慰霊祭にも可能なかぎり参加し、墓地・慰霊碑などを含めて踏査することも目的のひとつとした。

3. 研究の方法

研究の方法は、主に歴史学的手法に従った。つまり、ドイツ連邦共和国における市レベルの公文書館を複数訪問し、戦災復興関係の史料を中心に調査を行った。また、郷土史(都市史)として分散・分立している空襲戦災史を把握するためには、地域の博物館・歴史協会・郷土史家らが発行する都市戦災史を収集する必要があったために、数多くの都市をまわった。たとえば、プフォルツハイム、ザールブリュッケン、ミュンヘン、ヴェルツ

ブルク、ニュルンベルク、ベルリン、ライプツィヒなどである。

公文書に関しては、慰霊祭の市長演説記録がまとめられており、その微妙な言葉の変遷について分析をおこなった(とくにプフォルツハイム市とヴェルツブルク市)。また、慰霊祭は1945年頃から実施されていることが多かったが、その後は慰霊祭の期間・場所などをめぐって市民のあいだでも議論がなされている。ここに公的な記憶をめぐって、政治・民間レベルでの相克が見受けられる点を掘りさげることを研究調査方法のひとつとした。

4. 研究成果

文書館の調査としては、プフォルツハイム市、ザールブリュッケン(ザールラント州立)、ミュンヘン市、ヴェルツブルク市、ケルン市、そしてライプツィヒの国立図書館などでの調査を実施し、公刊書籍および公文書を収集した。

その結果、空襲慰霊は戦後初期で重要な主題として取りあげられつつも、「復興」の名のもとに忘却していくプロセスが浮かび上がってきた。そのなかでは、西ドイツでは初期段階で占領軍との関係から悲惨さの強調は行われなかった。とくに慰霊祭をアメリカ軍、フランス軍などの関係者と実施していた点も重要であろう。つまりそこには、占領側からの「記憶への圧力」がかけられていると考えられる点と、終戦直後から慰霊行為の「国際性」が認められる点をどのように考えるかという問題が横たわっている。これらは、忘却と記憶を対立的に考えることに対して批判的な視座を投げかけている。

その後1950~60年代前半には、空襲慰霊祭の当日に「都市の再生」が記事として繰り返し用いられるようになった。しかし同時に、それまであまり強調されなかった「悲惨さ・破滅」なども前面に出てくるようになった。これは体験の生々しさ(トラウマ)との距離を保てるようになったこと、そして対米・対英に一定程度の距離を持てるようになったことが影響していると考えられよう。くわえて、ヴェトナム戦争でのアメリカ軍の空襲は、ドイツの空襲に着目される契機となった。

また西ドイツの特徴としては、キリスト教組織と慰霊祭との密接な関係が認められた。宗教を通じた和解作業は、戦後直後から継続的に行われていることが確認された。教会再建についても、廃墟のまま残すのか、再建するのかをめぐって議論が重ねられている。実際には、日本ではあまり知られていないが、ドイツでは数多くの戦災教会が残されることとなったり、教会構造に空襲の記憶が埋めこまれたりした。たとえば、プフォルツハイム市の教会の建材には、瓦礫の一部が用いられている。なお、瓦礫の利用はほかの都市で

も観られる。

東ドイツでは戦後直後から戦災の悲惨さは、都市復興の予算獲得のために喧伝された。これは冷戦の深刻化が進むにつれ、対米・対英非難のための材料ともなったのである。このような状況でドレスデン市のように、死者数を誇張して増やし、悲惨さを強調するなどの事態も生じたのである。

これらの成果は、調査研究報告として論文化し、研究会でも複数回におよび報告をおこなった。また、社会への研究成果還元の一環として市民講座などでも戦後ドイツの空襲記憶に関する講演を受けもった。これは、2016年度から「全国空襲戦災を記録する会」の運営幹事に就任したことも関係している。研究を通じたつながりは空襲研究にとって欠くべからざる条件であり、その点でも研究は進捗したといえよう。なお、2018年8月の研究会、さらにはその後も成果を報告していく予定である。

今後の課題としては、プフォルツハイム市に調査を集中させたことで、東ドイツ地域で詳細な調査が実施できなかった点である。本研究では東ドイツに関しては、二次文献にたよる点が多かったが、今後の研究調査では市レベルの調査を綿密に行うことが必要だろう。なぜなら、旧東ドイツは先述したように空襲記憶に関して、「神話化」されている面があり、「被害の強調」が前面に出てしまっている。しかし、草の根レベルではイギリス・コヴェントリーとの関係が築かれるなど、別の側面も見え隠れしている。そのメカニズムを東ドイツ史の研究の俎上に載せつつ、新たな歴史像を提示するために展開していく必要がある。

【参考文献】

柳原（2016）「戦後ドイツの歴史論争に空襲論争を位置づける」詳細は以下。

柳原（2017）「企画の趣旨　そしてそれをさらに『越える』ために：『空襲の記憶』の境界　時間・空間・学問を越境して」詳細は以下。

柳原（2018）「【調査報告】戦後社会の『平和の風景』を探る（2）　- ドイツ・プフォルツハイム市での実地調査をもとに - 」詳細は以下。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

柳原伸洋「戦後ドイツの歴史論争に空襲論争を位置づける　「被害者の国家」の形成」
『独語独文学研究年報』44号（2018年5月）

251-266頁、査読なし。

柳原伸洋「企画の趣旨　そしてそれをさらに『越える』ために：『空襲の記憶』の境界　時間・空間・学問を越境して」戦争社会学研究会『戦争社会学研究』1号（2017年）74-83頁、査読なし。

柳原伸洋「【調査報告】戦後社会の『平和の風景』を探る（2）　- ドイツ・プフォルツハイム市での実地調査をもとに - 」『東海大学紀要文学部』105号（2016年11月）155-169頁、査読なし。

柳原伸洋「日本・ドイツの空襲と「ポピュラー・カルチャー」を考えるために　『君の名は』『ガラスのうさぎ』『ドレスデン』などを例に」『マス・コミュニケーション研究』88号（2016年1月）35-53頁、査読なし。

〔学会発表〕（計5件）

柳原伸洋「ドイツ・ヴェルツブルクの空襲慰霊祭　2017年3月の調査結果報告」第47回空襲・戦災を記録する会・全国連絡会議、2017年

柳原伸洋「『終わらない』空襲の世紀を考える　ドイツと日本を中心に」デモクラシー研究会、2017年

柳原伸洋「記憶と歴史のあいだを埋めるモノ　トタンとバラックの語りから」視聴覚史料と記憶　『大きな物語』への抵抗としての政治マンガと文化作品の心象風景、2017年

柳原伸洋「空襲記憶とドイツの都市　- プフォルツハイムの事例 - 」空襲被災者運動研究会、2016年

柳原伸洋「ドイツと日本、空襲をめぐる空想　- 『ポピュラー・カルチャーと戦争』の70年を考えるために」日本マス・コミュニケーション学会大会、2015年

〔図書〕（計1件）

柳原伸洋「ドレスデン空襲の公的記憶の変遷と拡がり　コヴェントリーとの関係を中心に」石田勇治・福永美和子編『想起の文化とグローバル市民社会』勉誠出版、2016年、235-252頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕
ホームページ等：とくになし

6．研究組織

(1)研究代表者
柳原 伸洋 (YANAGIHARA, Nobuhiro)
東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号： 00631847